

自校教育の取り組み — 学生の自校への愛着、誇り、居場所づくりに効果があるのか? —¹⁾

全学教育開発センター 元根朋美

1. はじめに (本研究に至った経緯)

大学への不本意入学者が抱える問題を解消するための方策の一つとして自校教育が着目されている。不本意入学者は、大学入学後、「大学が好きになれない」「大学で何をしたいかわからない」「学修に意欲がわかない」「大学に居場所が見いだせない」「将来の希望が持てない」といった問題を抱えている。学生と様々な会話をする中で、進路に関する話題がある。第一志望で本学に入学してきた学生もいるが、「他の大学全部落ちて、ここしか合格しなかった」「入試で行きたい大学全部落ちたし、せめて教職くらい取って卒業しようかと思って」と、希望とは異なるが、ここにしか選択肢が無かったために入学してくる不本意入学者が存在していることを改めて認識させられる。この不本意入学者の存在は、日本全国どの層の大学にも存在するといわれていると同時に、こうした不本意入学者の原因、分析、対応策などが研究され始めている。不本意入学者の増加の背景には、「大学全入化」の進行や家計の要請、「入りたい大学よりも入れる大学」への進学・進路指導がある。

「自校教育」とは、大川 (2006) によれば「大学の理念、目的、沿革、人物、教育、研究等の現況、社会的使命など、自校 (自学) に関わる特性や現状、課題等を中心的な教育題材として実施する一連の教育・学習活動」と定義づけられる。同時に大川 (2015) が大学コンソーシアム京都第 20 回 F D フォーラムの分科会「自校教育を通じた『建学の精神の具現化』」で発表した「学における 校教育の広がりとこれからの可能性」で「不本意入学者の増加対応としての自校教育」に着目した背景の分析によると『『自分が大学とどう関わっていくか』を意識させる授業科目である』とも認識されている。他にも、自校教育を説明している読売新聞 (2014) の注釈では「学生たちに、自分の通う大学の歴史や現状を教えて安心感を持たせ、学習意欲を向上させる。寺崎昌男氏が 1997 年に、『自分の居場所を理解することが、学生を安心させる』と立教大学で実践し、他大学にも広がった。読売新聞が行った今年の『大学の實力』調査でも、特色ある授業として大学名を冠した自校教育を挙げる大学が目立った。」と説明している。

自校教育が展開され始めた背景は大きく 3 つ、1. 「大学設置基準の大綱化に伴う教養教育の多様化」、2. 「大学理念・目的の明確化、周知の必要性」、3. 「『評価者』としての学生の資質向上」があると全国の大学を対象に自校教育の調査を実施している大川 (2015) は分析している。また、寺崎 (2010) らの先行研究によると、国公私立の設置別により、実施目的の多少の違いが存在しているが、自校教育の授業のシラバスで多くみられる到達

目標は次の7つである。1.「自学の目的・理念・使命を理解し、これを説明できる」2.「自校の歴史・沿革を理解し、これを説明できる」3.「自学で行われている様々な学問分野を理解し、説明できる」4.「自らが学ぶ方向性や将来を考える指針を形成する」5.「大学での学び方（学習スキル）を身につける」6.「大学で学ぶこと（所属すること）の意義を見出す」7.「大学における学習意欲を高める」。同時に、自校教育を行う意義として、先行研究でも「学生のアイデンティティ形成に資する」「学生にとって支えとなる」「居場所がわかる」「安堵感（安心感）」「自校に対する愛着を自覚する」等に対する効果がいわれている。

そこで本研究では、本学の学生の現状に立も戻り、一定の不本意入学者に対し、一般教養履修学生に対してキャリア教育の視点から「この大学に在籍してよかった」と思って卒業してもらえるよう、また、教職課程履修学生に対して教育実習不安の解消につながるよう、入学した「学びの場」を「知る」ことで、心地よい環境にする、学ぶ意欲につなげることが可能か自校教育の効果を検討した。

2. 本研究の調査概要

2015年後期に開講された1年生向けの2科目「社会と人間 B（教育）」「特別講義（キャリア形成1）」の受講生、合計101名に対し自校教育を実施し、その感想の調査を行った。調査時期は2015年11月から2016年1月である。調査方法は、質問紙によるアンケート調査を実施。質問紙は授業中に配布、翌週授業時に回収した。調査項目は次の3種類である。

- ① 自校教育前の大学に対するイメージ及び属性（入学前後の大学に対するイメージ（自由記述）や入試携帯、志望順位など）
- ② 学生に対しクイズ形式を用いた自校教育の解答と感想（問題は全部で14問。両キャンパス正式名称、漢字表記、学長、学園長、初代学長のそれぞれの氏名及び肖像、創設年度や大学の変遷、学園全体の構成や学園章、大学の理念を、時代背景も併せてクイズ形式で質問し解説）
- ③ 宿題として、授業の振り返り感想（自由記述）

また、②のクイズには解答の正誤に加え、新たに知った場合どの程度の驚きがあったのかを3段階（1へえ～3へえ）で表現する欄を設けた。

3. 結果と考察

本学の学生に対し、自校教育は自校への愛着、誇り、居場所づくりに効果があるかどうかを以下の諸点から分析した。

3-1. 単純集計結果

対象者の背景因子とアンケート結果の単純集計結果を以下に列挙する。

- 1) 対象学生の学科別割合：心理学部（74%）、こども学科（26%）
- 2) 進学決定時の状況
 - ① 進学推薦者（4分類）：自分自身（44.6%）、先生（25.7%）、家族親戚（24.8%）、友人先輩（4%）
 - ② 志望順位（4段階）：第1志望（36.6%）、第2志望（28.7%）、第3志望（16.8%）、第4志望以降（17.8%）
 - ③ 入試形態：公募制推薦（28.7%）、一般（26.7%）、指定校（23.8%）、AO（8.9%）、センター（5.0%）、留学生（4.0%）、スポーツ（1.0%）
- 3) 事前に帝塚山大学について調べた経験：ある（79%）、ない（21%）
- 4) 大学に対するイメージ（3段階）
 - ① 入学前イメージ：プラス（18%）、マイナス（49%）、どちらでもない（33%）
 - ② 入学後イメージ：プラス（49%）、マイナス（22%）、どちらでもない（29%）
 - ③ 入学後イメージ比較：向上（56%）、低下（29%）、変化無し（15%）

入学前のイメージは、過半数が悪く感じているが、入学後は良いイメージに変化していることがわかる。
- 5) 自校教育クイズ正誤率、既知率、驚き率の結果を図1に示した。

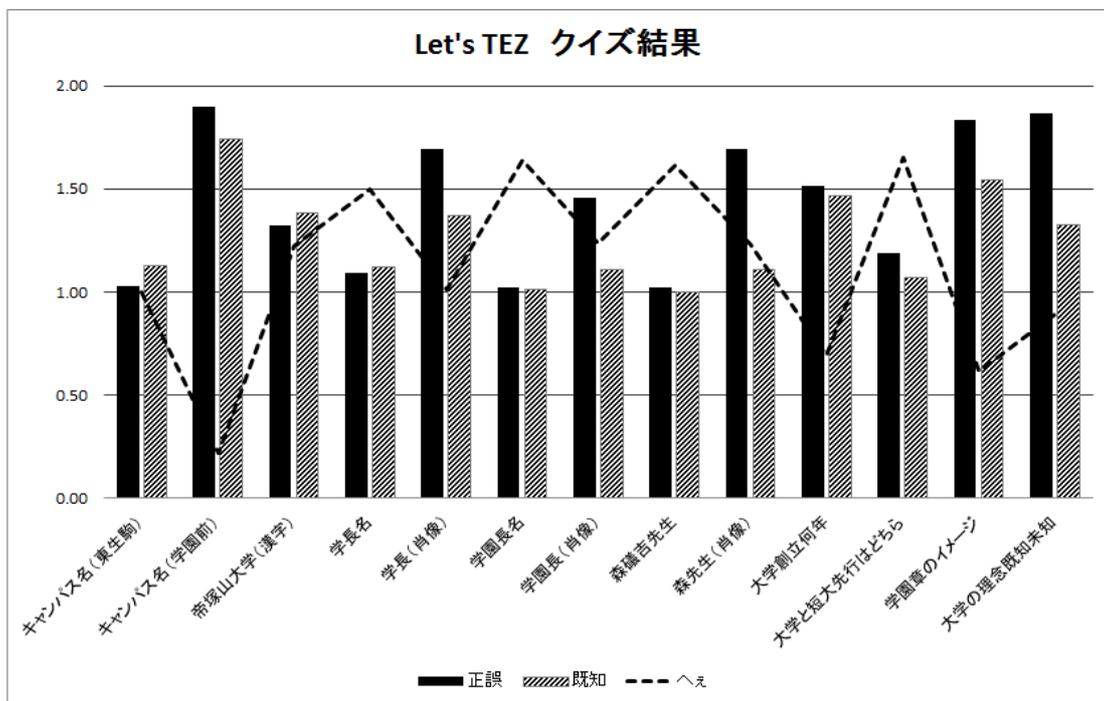


図1 自校教育クイズ正誤率、既知率、驚き率

図1に示すように、学長名、学園長名、初代学長名、短大大学創設どちらが先の問題に対して驚く率が高い傾向がみられた。

6) 学生の自校教育クイズへの評価の結果を表1に示した。

表1 自校教育クイズの評価

設問	そう思う	やや そう思う	あまりそう思 わない	そう 思わない
おもしろかった	52%	44%	4%	0%
よくわかった	67%	29%	4%	0%
ためになった	36%	51%	13%	0%

自校教育クイズに対し、おもしろかった、よくわかった、ためになった、と思う学生の割合が高かった。

7) 自校教育後の理念の認識、意識づけを表2に示した。

表2 自校教育後の理念の認識、意識づけ

設問	そう思う	やや そう思う	あまりそう思 わない	そう 思わない
理念意識生活しよう	20%	52%	22%	6%
認識深化	37%	50%	12%	1%
理念身に着け卒業	34%	52%	12%	2%

理念を意識して生活しよう、認識が深化した、理念を身に着け卒業したい、と思う学生の割合も高かった。

8) 安心感、愛着の涵養の結果を表3に示した。

表3 安心感、愛着の涵養

設問	そう思う	やや そう思う	あまりそう思 わない	そう 思わない
聞けて安心	14%	58%	24%	4%
もっと知りたい	16%	51%	28%	5%
愛着がわいた	20%	53%	22%	5%

自校教育を聞けて安心感がわいた、もっと知りたい、愛着がわいた、と思う学生の割合は、ややそう思うまでを含めると約8割に達した。

先行研究によると、自校教育を行う効果として、学生にとっての支え、安心感、愛着の自覚等があげられている。本学の学生に対し実施した自校教育においても、入学した「学びの場」を「知る」ことで、心地よい環境にする、学ぶ意欲につなげることができた可能

性があり、単純集計結果からすると、安心感や愛着の涵養に対し8割の学生が肯定的にとらえていることが示唆される。

3-2. 自由記述（授業の振り返り感想）分析

授業の振り返り感想に記載されている自由記述全文を精読し、いくつかのキーワードを設定した上で特徴的な文言を抽出し、学生の反応に関する分析を行った。（以下、引用文は原文のママであり、下線部は筆者によるものである。）

1) 「愛着」に対する効果

感想欄に書かれた「愛着」に関連する内容を検索すると、「愛着」という言葉そのものを使用しているもの、「好き」という言葉を用いて大学に対する好意を表現しているものが抽出された。

① 「愛着」という言葉そのものを使用して表現している例

「学べてよかったです。そして、この学園のおいたちを知れたのもよかったです。大学に愛着がわき、今回学んだ帝塚山大学の理念を身につけて卒業しようと思いました。（略）帝塚山大学に来てよかったです。」

「自分の通っている大学について深く（？）知ることで、すごく愛着がわき、この大学に来る前まで、正直、偏見を持っていたがこの大学への見方が大きく変わり、今後もこの大学で学び、仲間をつくり過ごしていこうと思った。」

「いろいろじょうほうを得たつもりだったが（略）知らないことを知ることができてよかった（略）学祭がより楽しみに帝塚山大学への愛が深まったじょうたいで向かえることができてよかった。」

② 「好き」という言葉を使用して表現している例（ゼロから好きへの変化）

「今までどこの大学と聞かれた。帝塚山大学と答えると相手が全然知らなかった。今回の授業を通して尊敬というより好きになっていると気がしている。」

「自分の学校のこともっと知りたい。自分の学校の歴史を知って尊敬してきた。好きになっていると気がしている。自分はこんな学校に通っていると自慢できると思ってる。これから帝塚山の理念を身につけて卒業しようと思う。」

③ 「好き」という言葉を使用して表現している例2（マイナスから好きへの変化）

「知ったことで、あまり好きではなかったこの帝塚山大学をだいぶ好きになることが出来ました。」

「前は学校のこと全然わからない（略）あまり自信がなかった（略）はずかしくて話せないです。しかし、今は自分の学校のことよくわかりましたから、この学校が好きになりました。学校の話をもっと知りたいです。」

「入学前は、みんなに『帝塚山行ってるねん』と言うことも少し言うのがはずかしかったけれど、(略) 今日さらに帝塚山大学のいいところを知ることが出来て、もっと好きな学校になりました。(略) 自分までしっかりしようと思えるようになりました。」

以上の感想は、元々大学に対する愛着や好感の感情がゼロであってもマイナスであっても、自校教育を行うことで自校への愛着の涵養に一定の効果があることを示唆している。

2) 「誇り」に対する効果

感想文中の「誇り」という言葉を検索した。ゼロから誇りに変化した感想と、マイナスから誇りに変化した感想とが抽出された。

① ゼロから誇りに変化した例

「入学して半年以上経ったけど大学のことはあまり知らなかったから今回の授業でたくさん知れて良かったです(略) 入学前まであまり知らなかったし、印象良くも悪くもあまり無かったけど、今回歴史を学んで、すごい学校なんだと少し誇らしく思いました。」

「知らないことが沢山あって、そんな状態で『帝塚山大学』の学生を名乗っていたことが恥ずかしく思いました。(略) しっかりと覚えておいて将来に自分の大学について誇りを持ちたいと思います(略) 理念に沿って勉学に励み、単に単位取得ではなく、意味のある大学生活を送りたいと思います。」

② マイナスから誇りに変化した例

「自分の学校について全然知らなかったことを知れたしすごく興味を持ったことも多かったし、声を出して驚くことも多かったです(略) なんだかほこらしく自分の母校がそうだったと考えるとなんだか嬉しい気持ちになりました。私はこの帝塚山大学は本意で入った学校じゃなかったから、人前で自分の大学名とかあまり言うのが嫌でした。けど今日話を聞いてイメージが変わったし、今、この学校で学んでいる「帝塚山教育」の中から得意を見つけて、これからの自分に活かして学校を卒業する際、あるいは就職の時は、この学校をほこりに思い日々がんばりたいです。」

「自分の学校の歴史を知って尊敬してきた。好きになっていると気がしている。自分はこんな学校に通っていると自慢できると思ってる。」

以上の感想は、元々大学に対する誇りや自慢の感情がゼロであっても、恥と感じるようなマイナスであっても、自校教育を行うことで自校への誇りの涵養に一定の効果があることを示唆している。

3) 「居場所づくり」に対する効果

「入学してから帝塚山大学のことをあまりしらなくて、自分でもそんなに知らないまま、

8カ月ぐらいすごしてきたけど、改めて帝塚山大学のことを知って、今まで思っていたよりも、もっと来てよかったと感じました。(略) これからは最初からもっと自分から知って
いこうと思いました。」

「何となしに入学したこの帝塚山大学。ここにこんなに深い歴史があるとは思っていなかった。でも、今回の授業で大学の歴史を知って、帝塚山大学に入ってよかったと思えた。

(略) 自分の通っている学校の歴史を知ることも必要なんだと思っし、伝えていかない
といけないとも思った。」

「進学の時この学校の心理学がいいと思う。それ以外わからないです。もっと大学のこ
とがわかったらうれしかったです (略) この学校に入ることがよかったです。」

以上の感想は、元々大学に対して所属感が無い状態であり、それを自覚しない状態であっても、自校教育を行うことで「来てよかった」と自校への所属感、居場所づくりの涵養に一定の効果があることを示唆している。

4) 多様な効果1：到達目標「自らが学ぶ方向性や将来を考える指針の形成」との関連性
学生生活を改めて自覚したことを述べた感想があった。

「自分の中の自分と向き合える時間ができたので良かったです。(略) 改めて思い直すことができました。(略) 今回をきっかけに少しずつ知識を増やしていければいいなと思っております。」

「再認識することができました。(略) とても由緒正しい学園だなと思いました。」

以上の感想からは、自校教育の到達目標である「自らが学ぶ方向性や将来を考える指針の形成」の涵養に一定の効果があることを示唆している。

5) 多様な効果2：到達目標「大学における学習意欲を高める」との関連性

自校の歴史や理念を知ること、今後頑張りたいと述べた感想があった。

「帝塚山大学は家からも遠いし、レベルが低いので入学するのをかなり迷った。(略) 今もまだこの大学でよかったのかは不安ですが、良い歴史もかなり知ることができたので
これからは周りを頼り、自分で頑張っていきたいです。」

「帝塚山大学のことについて自分はこんなにも知らないことがあるのかと思われた。最初は興味本意で話を聞いていたけど、話を聞いているうちに帝塚山のことをもっと
知っていききたい。そう思えるようになっていた。(略) 四年後卒業した後に、自分の母校は
こんだけの歴史をつみかさねてできた大学なんだと言うのを色々な人に胸を張って言える
ようになってみたいと思った。」

「キャンパスなもきちんとした名前も書けない帝塚山大学の生徒に恥ずかしいと思いました。別知らなくてもいけるけど、知ってて損することはない。私もちょっと調べてみよ

うと感じた（略）これからあと3年間、この大学で頑張っていこうと思います！」

「帝塚山大学の歴史を聞くというのは今までになかったことだと、聞いてみてよかったと思う。自分で調べてみようというのは正直課題でもない限りすることではないので、やはり自分の学校について、ある程度知識をつけておくことも必要だし、ためになったと思う。（略）残り3年お世話になる帝塚山大学の理念を身に付けて、立派に卒業していきたいと思う。」

以上の感想は、自校教育の到達目標である「大学における学習意欲を高める」の涵養に一定の効果があることを示唆している。

6) 多様な効果3：不本意入学学生への効果

「大学のことなんて入学してもほんとうに興味がなかったので正直、なにも知りませんでした。でも授業で聞いてよかったし（略）大学はイメージだけで決めつけてはいけないと改めて感じました。入ってみて帝塚山のよさに気づけてよかったです。」

「楽しく充実している大学生活を送れているのは親がいかせてくれるからであることを忘れないで仲間をすごそうと改めてこの授業を聞いて思った。」

「私は帝塚山大学を好んで入学したわけではない（略）知らなかった帝塚山の歴史を知れてよかったと思います。」

「入学前のイメージしてガラが悪かったり、良くないイメージがあったけど、改めて考えてみるとそれほどでもなかった。」

以上の感想は、不本意入学生に対して、無関心、マイナスイメージからの転換に一定の効果があることを示唆している。

7) 自由記述感想の2次元分類



図 2 自由記述感想の分類

図2に示すように、自由記述を「感情」と「知識」の2次元で整理すると、単純に知れてよかったと感じている感想から、知ることを起点に、自分自身と対話し、興味関心や自己奮起などの変化がある感想があった。この分類から、自校教育を行うことは、「知識を得る」、「喜び」、「愛着、誇り、居場所づくり」にとどまらず、知る（知識獲得）から感情の変化、行動の変化と、学生の意識・行動にまで影響を与えている可能性が示唆された。

3-3. 志望順位や不本意入学の程度と自校教育への反応に関する傾向の分析

次に、志望順位や不本意入学者、マイナスイメージを持って入学した学生に注目し、各質問項目とのクロス集計を行った。

1) 志望順位別のクロス集計

自校教育に対する振り返り評価を志望順位別にクロス集計し χ^2 検定を行ったところ、有意差のある項目はみられなかった。志望順位に関係なく自校教育の評価は高かった。

2) マイナスイメージを持って入学してきた学生の反応

マイナスイメージを持ち入学してきた学生の自校教育に対する振り返り評価から見える反応は、以下のグラフの通りであった。

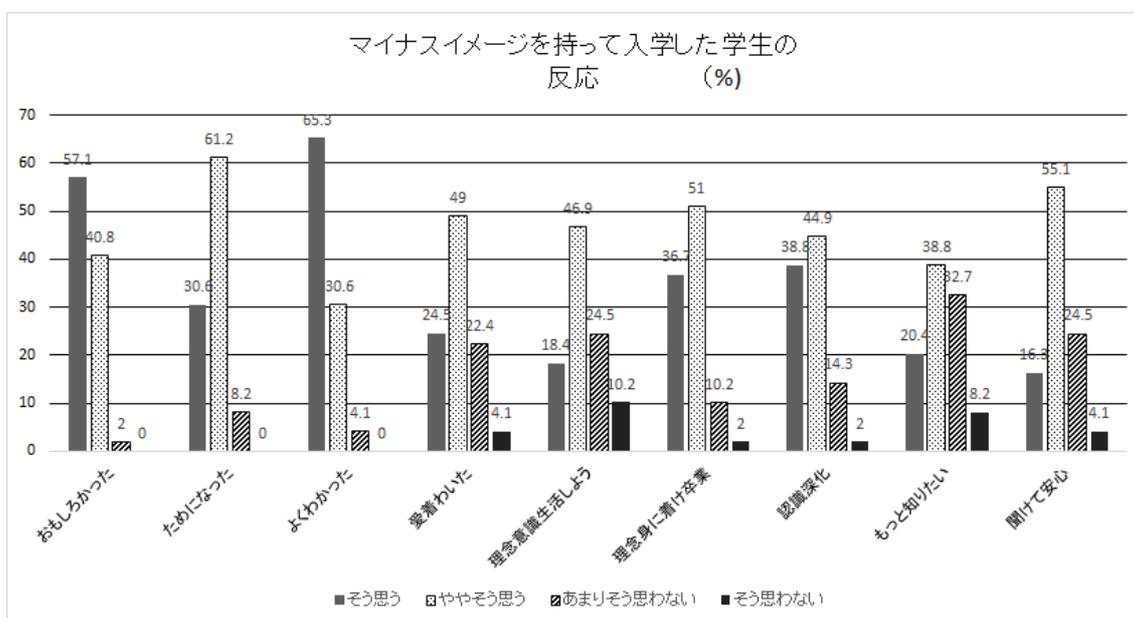


図3 マイナスイメージを持って入学した学生の反応

グラフが示すように、マイナスイメージを持って入学してきた学生にとっても、おもしろい感情や、愛着の寛容、安心感が生じていることがわかる。

3) 入学前イメージによるクロス集計

入学前イメージに関係なく、全項目で肯定的評価の割合が高く、分析結果に有意な差があったのは「聞けて安心」の項目のみであった ($\chi^2=11.348$, $df=6$, $p<0.1$)。

表4 入学前イメージによるクロス集計

		聞けて安心			
		そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
入学前	マイナス	2 (4.1%)	12 (24.5%)	27 (55.1%)	8 (16.3%)
イメー	±0	2 (5.9%)	12 (35.3%)	16 (47.1%)	4 (11.8%)
ジ	プラス	0	0	16 (88.9%)	2 (11.1%)

表4に示すように肯定的に捉えている割合は、入学前にプラスイメージを持っている学生は「ややそう思う」「そう思う」を合わせて100%である。一方マイナスイメージを持っている学生では71.4%にとどまった。しかしこのような集団でも自校教育を聞くことで安心だと感じる割合は決して低くないと解釈することができる。

4) 志望順位（4段階）と入学前イメージによるクロス集計

志望順位（4段階）別・入学前イメージ別にクロス集計し χ^2 検定を行ったところ有意差があったのは「第1志望」の層のみであった ($\chi^2=18.420$, $df=6$, $p<0.005$)。

表5 志望順位（4段階）と入学前イメージによるクロス集計

		聞けて安心				
		そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う	
第	入学前	マイナス	2 (16.7%)	1 (8.3%)	7 (58.3%)	2 (16.7%)
1 志	イメー	±0	0	7 (53.8%)	3 (23.1%)	3 (23.1%)
望	ジ	プラス	0	0	10 (83.3%)	2 (16.7%)

表5に示すように自校教育を聞けて安心したと肯定的に感じている学生の割合は、入学前イメージがプラスの学生が100%、入学前イメージがマイナスの学生が75%に対し、良くも悪くも無くイメージを持っていない学生は46.2%と低値を示した。すなわち、入学前に良いなり悪いなり、はっきりとしたイメージを持っている学生ほど、自校教育を聞くことで安心だと感じる可能性が高いことが示唆される。

以上1)～5)の結果から、自校教育の効果は第一志望者に高く、次に不本意入学者やマイナスイメージを持って入学した学生に高いが、はっきりとしたイメージを持って入学して来なかった学生に対しての効果は劣ることが示唆された。

3-4. 入学後イメージの変化（3分類）と自校教育への反応に関する傾向の分析

本調査は、入学後半年以上経過した1年生を対象としたため、入学前に比して大学に対

するイメージが変化している学生も多い。入学前後のイメージを比較すると、イメージが良くなった学生もいれば、変化のない学生、そして、イメージが低下した学生も存在した。そこで、入学後大学に対するイメージが低下した学生に対しても自校教育の効果があるのかを分析するために、入学後イメージの変化（3分類）と自校教育の評価を問う項目とのクロス集計を行った。その結果、有意差がみられたのは「自校教育がためになった」と「自校教育がよくわかった」の2項目であった。

1) 「自校教育がためになった」

自校教育に対する振り返り評価の一つである「ためになった」を、入学後のイメージ変化（3分類）別にクロス集計し χ^2 検定を行った（ $\chi^2=11.657$, $df=4$, $p<0.05$ ）。

表6 入学後のイメージ変化（3分類）別クロス集計

		ためになった		
		あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
入学後イメージ変化	低下	6 (20.7%)	9 (31.0%)	14 (48.3%)
	なし	4 (26.7%)	8 (53.3%)	3 (20.0%)
	向上	3 (5.4%)	34 (60.7%)	19 (33.9%)

表6に示すように、ためになったと肯定的に感じている学生の割合は、入学後イメージが向上した学生で94.6%、変化が無い学生で73.3%、低下した学生で79.3%であった。特に強く肯定的な「そう思う」と回答していた割合が高かった層はイメージが低下した学生（48.3%）であった。この結果から、イメージが低下した学生ほど、自校教育がためになると感じる可能性が高いことが示唆された。

2) 「自校教育教育がよくわかった」

自校教育に対する振り返り評価の一つ「よくわかった」と、入学後のイメージ変化（3分類）別にクロス集計し χ^2 検定を行った（ $\chi^2=14.574$, $df=4$, $p<0.05$ ）。

表7 「よくわかった」と入学後のイメージ変化（3分類）別クロス集計

		よくわかった		
		あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
入学後イメージ変化	低下	1 (3.4%)	8 (27.6%)	20 (69.0%)
	なし	3 (20.0%)	6 (40.0%)	6 (40.0%)
	向上	0	15 (26.8%)	41 (73.2%)

表7に示すように、よくわかったと肯定的に感じている学生の割合は、入学後イメージが向上した学生で100%、変化が無い学生で80%、低下した学生で86.6%であった。特に強く肯定的な評価をしていたのはイメージが向上した学生（73.2%）と低下した学生（69.0%）

であった。この結果から、イメージが向上した学生および低下した学生には、自校教育がよくわかったと感じる可能性が高く、その一方で、イメージの変化が無い学生にはばらつきが大きい可能性が示唆された。

3) 入学後のイメージ変化別にみた自校教育に対する評価のレーダーチャート

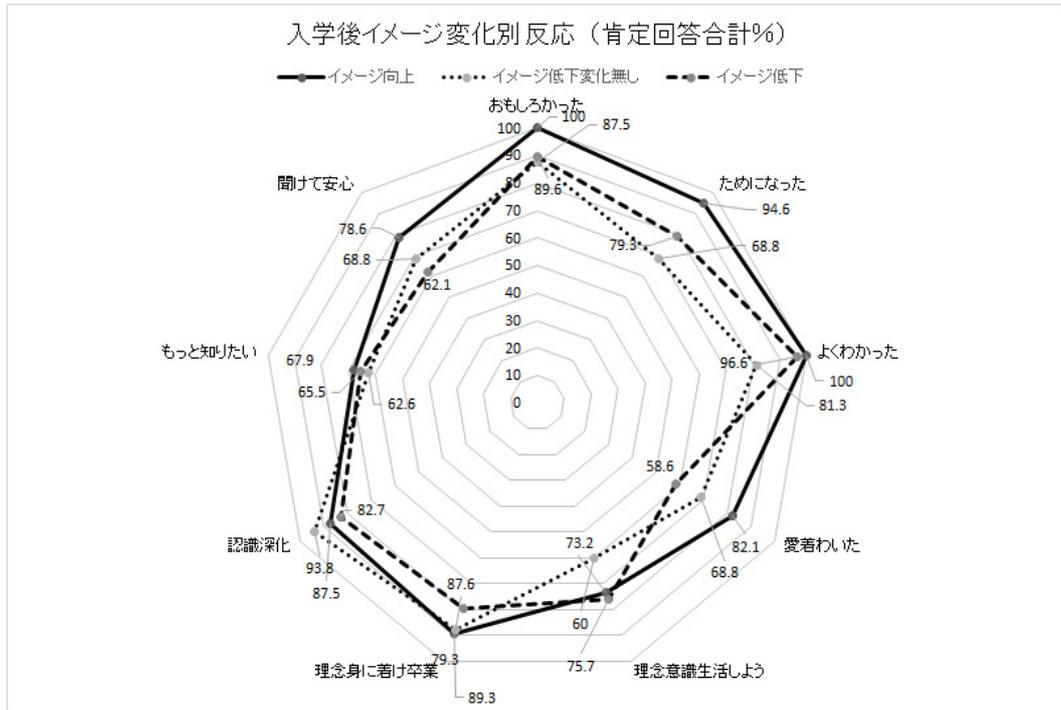


図 4 入学後のイメージ変化別にみた自校教育に対する評価のレーダーチャート

全体的に、イメージが向上した学生の自校教育の評価は全体的に高い傾向がみられた。次に評価が高い傾向がみられたのは、イメージが低下した学生である。イメージが低下した学生は、特に理解や理念を意識して生活しようとする項目に評価が高かった。一方で、一番反応が薄かったのは、イメージの変化が無い学生であった。

差は有意ではなかったが、おもしろいや愛着がわいた、もっと知りたいといった感情に関する項目に対して評価が高かったのは、イメージが向上した学生、次にイメージが低下したグループ、最後にイメージの変化が無い学生であった。また、理念に関する項目に対しての評価には、ばらつきがあったが、イメージが低下したグループの評価が一番高かった。

以上の結果から、入学後イメージが低下した学生に対しても自校教育は一定の効果があることを示唆している。また、本調査では、一部学部の一部学生のみを対象となったが、自校教育の効果を全学に広げていくためにも、授業形式や人材も含めた伝え方の普遍化に向けた工夫や、本調査は14問のみの内容であった自校教育の内容の精査も深めていきたい。

4. まとめ

本学の学生に対し、自校教育は自校への愛着、誇り、居場所づくりに効果があるかを、自由記述、単純集計、クロス集計を用いて分析した。その結果、不本意入学者やマイナスイメージを持った学生に加え、入学後イメージが低下した学生に対しても自校教育の効果はあるといえよう。

今後の課題として、自由記述内容のさらなる分析に加え、評価が低い学生が宿題である感想欄の文章は「良かった」など評価している傾向があることから、自由記述内容と自校教育の評価項目との関係の分析が必要である。また、本調査では、一部学部の一部学生のみ対象となったが、自校教育の効果を全学に広げていくためにも、授業形式や人材も含めた伝え方の普遍化に向けた工夫や、本調査は14問のみの内容であった自校教育の内容の精査も深めていきたい。

引用文献

1. 大川一毅「大学における自校教育の現況とその意義ー全国国立大学実施状況調査をふまえてー」秋田大学教養基礎教育研究年報,2006,pp.11-21.
2. 大川一毅「大学における自校教育の広がりとこれからの可能性」大学コンソーシアム京都第20回FDフォーラム第6分科会報告集,2015,pp.196-198.
3. 寺崎昌男「自校教育の役割と大学の歴史ーアーカイブスに触れながらー」金沢大学資料館紀要,5,2010,pp.1-17. より抜粋、筆者作成。
4. 「[大学の實力 現場を歩く]自校教育「居場所を理解」意欲高める, 読売新聞, 2014.8-15, 朝刊, p.14.

設置別	実施目的
国立	1. 「自校の現状の理解」に配慮し、それを目指す。 2. 自校史の沿革の理解
公立	1. 立地する地域の理解 2. 自学の理念・使命・目的の周知 3. 専門教育の一環
私立	1. 自学の理念・使命・目的の周知 ー建学の理念と建学の精神の理解 2. 自校史沿革の理解 3. 大学への帰属意識の寛容 (※3番目に一番力を入れている大学も多い。極端な例は「愛校心の涵養」)

5.

注¹⁾ 本論文の内容は、2016年2月26日金曜日(於:帝塚山大学 奈良・学園前キャンパス)に実施された人間環境科学研究所ミニシンポジウムで研究報告を行ったものである。